

ずいそう

ダム・土木構造物の主張

宮 島 咲

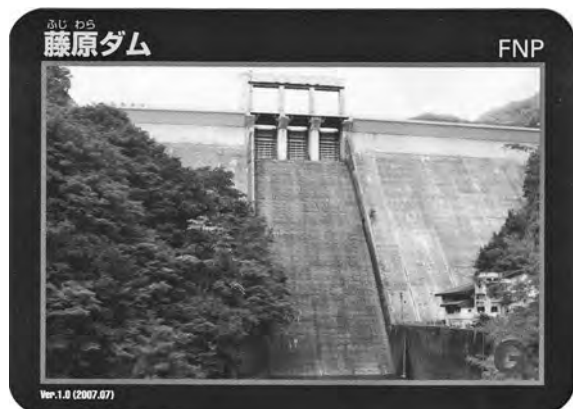


ここ数年前からインフラツーリズムと称し、ダムなどの土木構造物を見学するイベントが多くなった。ダムに関して言えば、10年ほど前は「森と湖に親しむ旬間」という夏に開催されるイベントにて、仕方なくおこなわれていた程度だったが、現在は春夏秋冬問わず、ひっきりなしに見学会がおこなわれるほどになっている。キッチリ数えたわけではないが、その数は10年前の5～10倍の数になるであろう。

昔のダムは人を寄せ付けなかった。天端立入禁止はまだましな方で、ダムへと続く道の入口から立入禁止にしているダムも少なくなかった。一般人が見学を申し込んでも断られ、管理所にパンフレットをもらいに行っても、職員から早く帰れという眼差しを受けていた。

昔のダムがこの様な状態であったことは、世論から来たものだと推測される。当時、「コンクリートから人へ」だの、「ダムはムダ」等の言葉が流行り、環境破壊の悪しきシンボルになってしまっていたからである。ダム管理者からしてみれば、人々の暮らしを守るために働いているのだが、それが全く理解されず、ただただ罵声を浴びせられる日々が続いたわけである。こうなると、訪問者を拒んでしまうことも頷ける。

11年前の夏、ダムカードというものが登場した。ダムカードとは、ダムに訪問しないと入手できないトレーディングカード形状をしたミニパンフレットだ。このカードが世間に対するダムの立ち位置を劇的に変化させた（写真—1）。



写真—1 ダムカード

ダムに行き、ダムカードを入手した訪問者はダムの役割を知ることになり、ダムは自分の生活と密接にかかわっていることを知った。ダムカードを配布するダム管理者は、数多の訪問者と会話を交わす機会ができ、貝の様に閉ざされた心が少しずつ開かれていった。こうなると、ダムはムダという世論は次第に見直されてゆき、ダムは暮らしにとって必要なものだという風潮に変化していった。

そして、ダムカード配布開始と時を同じくして誕生したのがダムカレーである。ダムカレーとは、カレーで造ったダムのことで、ダムの形をしたカレーとも言われている。ダム近隣にある飲食店で提供されていることが多く、10年ほど前は3ヶ所のダムサイトエリアで販売されていた（写真—2）。

一昔前は、ダムは町にとってお荷物の構造物でしかなかったが、それを逆手にとってダムを観光地化し、一儲け（町おこし）しようと考えたのである。これが今流行のインフラツーリズムの原点であると私は考えている。

そもそも、インフラ構造物は自己主張が足りなかった。どんな働きをしているのか、どんな天災から人々を救ったのかなど、自分の働きを世に広める行為はほとんどしてこなかった。ダムが洪水から街を守っても、「当たり前のことをしただけですから」という具合に、その働きを自慢することはなかった。



写真—2 ダムカレー

その控え目さが人々の心をつかんだ。もっとインフラ構造物の働きについて理解したいと。もっとインフラ構造物の働きを世間に広めてあげたいと。そして、インフラ構造物の管理者は、もっと自らPRせねばならないと気がついた。

PRをしはじめた管理者と、インフラ構造物で町おこしをしようとする人々。そして、もっと社会インフラについて学ぼうとする人々。これらが融合し、今、インフラツアーのブームが巻き起こっているのかもしれない。



写真一3 矢木沢ダム点検放流に訪れる人々

——みやじま さき ダムマニア&ダムライター——

